

柳江庵撰会所本『狂俳袖濡す』の紹介と翻刻

富田和子*

はじめに

役者評判記に見立て、名古屋名物や有名人評判などを記して、文化初年頃の名古屋の世相を描く『名府玉尽し』全(文化五(一八〇八)年 可笑著 未刊本¹⁾)がある。この巻頭は、井上土朗。「極上上吉 宗匠 土朗」、「風雅俳諧の達人と聞へ」、「当時の達物、親玉親玉」などと評される。蕪村が土朗宛の手紙(安永七(一七七八)年頃²⁾)の中で「尾張名古屋ハ土朗(城)で持つ」と持ち上げるほどの実力者なのだから当然であろう。これに、柳江庵鸞亭も載り、鸞亭は、「上上吉 点者 鸞亭」、「俳諧冠句達人当国并三遠美勢の名尊也」、「どなたがなんとおっしゃっても、近年日に増し御はんじやう」、「大評大評」などと評され、土朗にはやや及ばないものの、たいそうな遇されようである。また、鸞亭は、文化六、七年頃岐阜から移住したものと推定されているが、『金鱗九十九之塵』(天保末年以降弘化頃までに成るか³⁾)の「◇瀬宜町」の項で、「△狂俳撰者 初名鸞亭 後 柳江庵雁砂⁴⁾」と記され、その住人代表の一人目に挙げられる。これらから鸞亭が、文化五年には名古屋でとても有名な俳

諧冠句点者であり、その後、狂俳撰者となっていくことがわかる。そして、文政三(一八二〇)年に、鸞亭の一周忌追福のために、鸞亭の撰句を集めて編まれた『冠句選』(土蔚序、米袋跋⁵⁾)は、半丁に一句掲載で、春溪の画、四十七丁の入る濃淡二色摺りの豪華本である。そして、この跋文を寄せる米袋が、二代目柳江庵を継承し、三代目を麦袋が継承する。つまり、鸞亭は文政二年に亡くなり、「柳江庵」は襲名されるほどの大名跡であったことがわかる。さて、本稿で取り上げる柳江庵撰の会所本『狂俳袖濡す』は、刊記などはないが、表紙に「鸞亭、佛追福」とあり、撰者は「柳江庵」であることから、初代柳江庵が亡くなった文政二年頃刊と推定したい気持ちが起こる。そうなれば、名古屋の「狂俳」の呼称について、従来よりも十年早い使用を確認できることになるからである。というのは、宮田正信氏が『雑俳史の研究』「文化文政期の雑俳」の中で、「当時名古屋では「雑俳」と同義で「狂俳」の称が行はれた⁶⁾」とされた。これを受け、「狂俳」の呼称が使われ始めたのは、化政期頃と推測しつつも、その初見を、文政十二(一八二九)年刊の『奉納榎木社 狂俳冠句壹編』(撰者 味足斎・一俣舎。巻本 泉田之郷(刈谷) 枝雪)としてきたからである。

しかし、化政期の名古屋の雑俳会所本は現存するものが少ないため、『狂俳袖濡す』の掲載句の俳号からみて、初代柳江庵鸞亭とは断定しがたいところがある。もちろん『冠句選』に六句載り、それ以後、見られない谷風や、『冠句選』に一句載り、それ以後、見られない花風・如雀・如雷がいるのは確かである。しかし、現存するものが少ない中、初代柳江庵よりも、天保七（一八三六）年、同十二年に「柳江庵鸞亭」を名乗る点者がいることから、こちらの「柳江庵鸞亭」と見るほうが穏当なのである。

では、十九年後とはいえ、当時、柳江庵を継承する二代米袋、三代米袋がいる中で、なぜ初代と同じ「柳江庵鸞亭」を名乗ることができたのであろうか。疑問が残る。

それに、鸞亭は、先に見たとおり『金鱗九十九之塵』で「△狂俳撰者 初名鸞亭 後、柳江庵雁砂」と記される。この「柳江庵雁砂」は、石橋庵真醉撰の『狂俳冠句選集』初編（天保八年）の自序に、「爰に集むる狂俳の冠句は樗良先生の風調をまねび、近くは古柳江庵、鳩紗翁の撰に倣ひ」とあることから、天保八年には亡くなっていたと推測できる。とはいえ、『冠句選』では、序に「故人鸞亭先生也」とあるばかりで「雁砂」に触れていない。また、本稿で紹介する『狂俳袖濡す』は、「鸞亭佛追福」である。では、文政二年に亡くなった鸞亭と、天保期に点者をする鸞亭の間にどのようなかわりがあるのであろうか。興味が尽きない。

そこで、本書を翻刻し紹介したい。末尾に図版を付す。

因みに、最近、表紙に「文政八 乙酉帆月（十二月）」と興行年を明記した清書卷『狂俳満願の暁』（石橋庵評 瀬戸三社奉納左右巻）（名古屋市中 野田實家文書の内）をみる事ができた。年代の明確なものではこちらが初見となる。この点者の石橋庵は、『尾張狂俳

の研究』で紹介した石橋庵真醉のことで、前掲の『狂俳選集』初編の撰者である。尾崎久彌氏は彼を「椒芽田楽（醫、神谷剛甫）」と相並んで、名古屋文壇の牛耳を執つたものである」と評された人物である。そして、瀬戸三社は、三社大明神社（現在の愛知県瀬戸市中水野町一―五七九）のことであろう。この『狂俳満願の暁』の出現によって、文政期には三河だけでなく尾張でも興行が行われていたことが実証された。また、当時五十二歳（数え年）の真醉は、前年正月から「江戸柳樽風の誹諧」をはじめている。『狂俳満願の暁』の出現は、狂俳と江戸柳樽風の誹諧（川柳）の興行の違いについて検討できそうである。しかし、興行年と興行場所は明確ながら、保存状態が悪く、ほとんど内容を確認することができないのは、とても残念なことである。

次に、簡単に書誌を記す。

○『狂俳袖濡す』

刊記はないが、表紙に「鸞亭佛追福」とあることから、文政二年頃と推定したい会所本。撰者、柳江庵。巻本、遊系。鸞亭は初代柳江庵、撰者は『冠句選』で跋文を寄せる二代目柳江庵米袋であろうか。しかし、鸞亭は天保期に点者をする柳江庵鸞亭ではないと断定できない。小本（二五・〇×一〇・一糎）。墨付き六丁（表紙共）。共表紙（裏表紙欠）。百番句まで掲出。架蔵。題は折句七題、狂俳五十一題で、それぞれを列記すれば、次のとおり。

折句七題。

キフツ・アハセ・トコニ・ナツメ・ハハキ・フクサ・ヤクミ

狂俳五十一題。

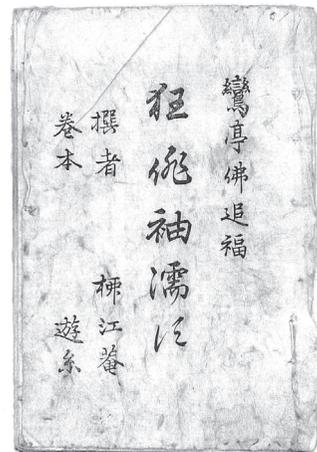
折く・おけといふに・きのふけふ・くらひゞ・時雨の跡・にく

まれ子・むつかしう・案事く・花の里・七草・秋の夜・正月・短
か夜・乳もらひ・風に吹れ・目出たがり・留守番・力に任せ・簀子
縁・成合に・お姫様を女房にして・の鉄砲・はさかひ帯・むしこか
ら・もやぐ・やれうれし・何遍も・金持ちになる妙薬・犬の声・
戸棚・子を抱て・手を組で・宿とりて・小気味能・小半日・情出し
て・水くさう・窓の月・天窓刺・田にしとりの娘・杜若・奴・年
男・梅の小家・萩の山・平気さん・目をほちく・門口・柳腰・姫入
ざかり・枯声。

○凡例

翻刻にあたり、読解の便をはかって、次のように扱った。

- 1、濁点、句読点を施した。ただし、底本にあるものと、恣意に施したものとを区別していない。
- 2、異体字を含めて漢字は原則として通行字体に改めた。ただし、例外もある。
- 3、慣用・誤用の漢字や仮名遣いは、誤解のないと思われるところはそのまま残した。
- 4、(一)内の文字及びルビは、恣意に施したものである。
- 5、※以下に、簡単な語釈を記した。
- 6、底本は、架蔵本を使用した。



○『狂俳袖濡す』

鸞亭佛追福

狂俳袖濡す

撰者 柳江菴(庵)

巻本

遊糸

花に出る日を紙衣ぬぐ

巴水

表紙

案事く

※案事Ⅱ気にかかっていること。心配事。※花に出るⅡ目立つところに出る。[参]敵持ち月は見れども花に出ず、(柳多留・六)※紙衣Ⅱ和紙を貼り合わせて作った粗末な着物。

折く

聲呼らぬ返事する

遊糸

花の里

貫はず躍る非人居

其洞

※花の里Ⅱ花の咲く里。又は、遊女を花に見立てて遊里のこと。

※非人Ⅱ江戸時代、穢多とともに土農工商の下におかれた被差別階層の人。生産的労働に従事することは許されず、遊芸や物貰いなどで生活し、刑場の雑役などに従事した。[参]吉原でひにんのそふをは

たす也（柳多留・三一）

子を抱て

女房には、き解せたり

亀眼

※ははきはき簀はら。※解せたりはらの先の乱れを整えさせた。

簀子縁

居すわり覚へて梅を見る

雅楽

※簀子縁すのこえん簀子（角材）を並べて造った建物の外側の濡縁ぬれえん。寝殿造りひんぎょじで、広庇ひろひさしの外に造った板縁いたのへ。簀の子で造ったのでいう。

水くさう

達者たつしや自慢じまんが先へ行

香枝

※水くさうみづくさう水くさい。よそよそしい態度である。

柳腰

桃色ももいろほどに酔てをる

鳥仙

お姫さまを女房にして 白味噌汁しろみそじゆにしられたり

企

※白味噌しろみそ味噌あじのうちでも上等とされ、高級、美味などのたとえにも用いる。主に京都で作られる西京味噌などがある。

正月

隣となりから百ひゃくかりに来た

其洞

十 蜻蛉せみの小戻りこもどりしたり 涼すず

※涼すず雨あめが降ふつたりして、地上にたまつた水。水たまり。 一才

七草

はやしながらに舟が行

呉朗

目出たがり

聞えぬ耳へ年をきく

如雀

平気さん

毎日負ける角力かくりきが行

一宗

もやく

千手蚊せんてんの口搔か給ふ

遊糸

※千手せんてん千手観音せんてんくわんおん（千手千眼せんてんせんがん観自在菩薩くわんじざいぼさつ）のこと。衆生しゆじやうをあまねく濟度きやくどする大願だいがんを千本せんぽんの手に表す観音くわんおんで、千は無量むりやう円満えんまんを表す。ふつう四十二しじふにの手を持つ像ざうにつくる。特に虫の毒どく・難産なんさんなどに秀ひでており、夫婦ふうふ和合わがわの願ねがいをも満たすという。※蚊ぶんの口くち蚊ぶんや蝨ぶなどに食くわれた跡あと。

秋の夜

拍子はしが付つて宵寝よるねする

燕山

※拍子はしが付つて何なにかのはずみで。 力ちからに任せ

くどく酔人よひびとを突つこかす

香枝

※突つこかすつ突つき倒たす。

むつかしう

坐頭ざとう八糸はちいとに懸かつたり

紫麦

小気味能

柳やなぎの土手どてで脱だかへる

其白

※柳やなぎの土手どて『江戸名所図会』へ一・柳原堤やなぎはらひらに描えかれ、古着屋ふるぎやの並ぶ地ちとして有名な柳原土手やなぎはらどてのこと。※脱だかへるだ着替かえる。

何遍なんべんも

草履くわだ探たす燈あかりを消けらかす

ツシマ玉之

二十

※背戸せうと家の後あとろにある庭にわや広場ひろばで、人目ひとめにつかない場所。一ウ

花の里

人ひとにほえ付つ犬いぬがをる

龍舩

金持かねもちになる妙葉めいへ

なめて見みりやちと小暖こぬるとい

花仙

宿しゆくとりて

宿しゆくに一夜いちやも寝ねなんだり

如雷

何遍なんべんも

男おとこにしたい八卦はちが見る

谷風

杜若つばき

鳥影とりかげさしてほどけたり

巴水

むしこから

法はふ（報ほう）謝あやまりした手てが抜けぬ也

龜卜

※むしこむしこむしかご（虫籠むしご）。※報謝ほうしゃ物ものを贈たまるなどして報あやまりすること。

成合なりあひに

脱捨だつしや曲まがりて借かに行

花風

※成合なりあひ成なりり行きゆきに任まかせること。

くらひゞ

胸むねぐらとつた女房にようばう拜まがむ

湖石

情出じやうだして

飯いもるうちに煮豆にまくふ

柴町

※くらひゞくらひゞ生活せいかつに困まどること。また、その者。

三十

煙主えんしゆに花はなの名なとへへバ生なま（胡こ）瓜うりかな 不及ふたふた

二才

花の里 真ひる曇りに鳩が鳴く
 巴水
 むつかしう 煤掃天窓抱(包)んだら 雅楽
 目出たがり 草臥足を寝さしやせぬ 如雀
 ※草臥足 歩き疲れてくたびれた足。疲れた足。
 おけといふに 廓の旁(傍)へ曲るなり 柳枝
 ※おけといふに 止めておけと言ふの意。
 しぐれの跡 猫が茶釜の蓋落す 呉朗
 ※猫は茶釜の蓋で狩人が撃つ弾をよけながらその数を数えているが、最後、狩人が別に持っていた御守りの命(いのち)で撃たれるという
 『猫と茶釜』(『日本昔話大成』七卷二〇頁(二五三A)。愛知県・岐阜県にも分布する昔話)の化け物語が想起される。
 簀子縁 いひ分(わ)りたいおとがする 其白
 正月 くふ手を出すもどかしい 井堀野人
 折く 日懸の筒でかりる也 不及
 ※日懸(掛)け 毎日一定の額の金銭を積み立てること。また、その掛け金。
 やれうれし 酔人にはぐれあふせたり 香枝
 戸を明る 罈(こたま)を遣るや鳩(に)の秋 里瓶
 四十
 杜若 合鏡の目がよどむ 山月
 子を抱て 鉢の子へ銭入れさせる 花菜
 ※鉢の子 僧尼が托鉢の時に所持する器。
 戸棚 車の上に鳴つて行 巴水
 年男 笑ひ終つて始めたり 雨晴
 枯声 鯨いとなむ人がよる 巴水
 もやく 帛紗がさばけかねる也 湖石

乳もらひ 中々狎がよせ付けぬ 遊糸
 情出して おシヨケの客が齒をほせる 龜卜
 ※シヨケ(所化) 寺の会計や雑務を扱う下級の僧。納所坊主。
 ※ほせる 穿る。隙間にはさまったものをつつき出す。
 天窓刺(あたま) 夫(それ)からも子が二人出来 呉朗
 ※天窓刺 坊主頭になる。ここは、頭を刺つて僧になること。
 五十
 如月や伏見街道の土細工 不及
 ※伏見街道 京都市東部を南北に走る道路の呼び名。五条通りから南下し伏見に通じる。沿道に東福寺・伏見稲荷大社がある。全長約六キロ。※土細工 土を焼いてつくった細工物。ここは伏見人形(京都伏見で製する土製の雛人形。安土桃山時代頃から作られ、形や彩色の素朴なもの)のこと。 三才一
 梅の小家 明捨(あきすて)にしてお留主なり 井堀野人
 ※明捨(開け捨て) 戸などをあけつ放しにする。
 子を抱て うまさうに顔なめてをる 如雀
 金持ちになる妙薬 嘔(くそ)に散て仕舞たり 烏仙
 ※嘔(くさめ) しくしゃみ。
 力に任せ 題目の珠数すりすえる 呉朗
 ※珠数 数珠のこと。「珠数」とも書いた。
 はさかひ帯 花の小舟を漕(こ)ぎ行 椰朗
 情出して 疱瘡(かさ)すり澄す気(き)でみがく 龜卜
 くらひゞ ひやひな処(ところ)で涼(すず)しがる 里瓶
 犬の声 取揚(と)婆(ば)々(々)へは(は)しる也 紫雀
 門口 尻(しり)から逃(に)げて手をせきる 如雀
 ※せきる 塞(ふ)さる。せきとめること。

〔屋根草にくれ行春の見ゆるかな
六十〕

時雨の跡

何遍も

力に任せ

※くさうらしい。

やれうれし

萩の山

の鉄砲

※の鉄砲でたらめ。ほら。

むつかしう

門口

※剃毛||剃り落としたり毛。髻剃り後の残り水なのだろうか。貴重な水を無駄にしないで門口の打ち水に使う様子。

やれうれし

鰻ハきのふに成てをる

〔朝影や鳩のなぐさむ蟬の殻
七十〕

しぐれの跡

奴

小半日

※画絹(えぎぬ・がけん)||絵絹の一種。日本画をかく時用いる画布。とても細かい繊維の半透明性のシルクで織られたもの。

にくまれ子

※手妻||手品。奇術。

窓の月

きのふけふ

巴水

三ウ

東月

山月

東月

鳥仙

巴水

馬穴

不及

生笑

四オ

竹馬

亀ト

呉朗

花風

香枝

湖石

遊糸

ツシマ玉之

遊糸

時雨のあと

田にしとりの娘

情出して

〔七草や摘もはやすも女夫同士
八十〕

※女夫||夫婦。妻と夫。

蝶夫なりに分れたり

一石打た手が退かぬ

※一石||一つの石。ここは、碁打ちを楽しむ様子。

目をほぢく

※ほぢく||穿く。

手を組で

※遠見||遠くを見ること。高い所にのぼって遠方を見張ること。

小気味能

おけといふに

※土くひ||土食い。亜鉛や鉄分の不足で、妊婦が土壁をかじった

り、地面の土を食べることがあった。

何遍も

やれうれし

姫入ざかり

※おいど||御居処。「おしり」をいう女性語。

藤咲くや鞍工合よき在所馬

九十

※在所||近隣の田舎。

折く

きのふけふ

山伏を見て鴉啼く

野遊びに目を付てをる

質屋へ通ふ着物也

遊糸

蕪山

四ウ

湖石

紫麦

古友

香枝

椰朗

山月

全

其舩

木鱗

五オ

都岳

柳枝

花の吹雪の袖払ふ

恋を忘れた猫が来る

留主番

膝皿包む片手出す

竹馬

※膝皿＝膝がしらにある皿のような形の骨。

乳もらひ

元の眉毛に成てをる

金蝶

短か夜

ひとり寝にさへ足らぬ也

井堀野人

案事く

配ざいをして猪口を盛

田徳

※配ざい(配剤)＝①薬の調合。②とり合せ。

くらひメ

塩茶の下女に刎られる

遊糸

※塩茶＝塩を少し加えていた番茶。悪酔いに飲ませる。※刎られる＝拒否される。

にくまれ子

いつち躍の手がかるい

香枝

※いっち＝一番。

やれうれし

仏間払へバ盆が来る

いろを

秋風やはれくしくも関の松

巴水

※関の松＝勧進帳で有名な安宅の関の松のことか。

五ウ

注

- (1) 『名古屋叢書』第十六卷「風俗芸能編」(1) (愛知県郷土資料刊行会 一九八二年) 所収。
- (2) 名古屋市博物館蔵。「中日新聞」二〇〇七年一月七日朝刊掲載。
- (3) 鈴木勝忠編『天保名古屋狂俳集』(『雑俳集成』第一期 十二頁 東洋書院 一九八五年) 五頁。
- (4) 『名古屋叢書』第六卷「地理編」(1) (愛知県郷土資料刊行会 一九八二年再版) 解説二頁。
- (5) 『名古屋叢書』第八卷「地理編」(3) (愛知県郷土資料刊行会 一九八三年再版) 三九五頁。

- (6) 既出『天保名古屋狂俳集』四五頁。
- (7) 『名古屋市史 学藝編』(名古屋市役所 一九一五年) 一七五頁。
- (8) 宮田正信『雑俳史の研究』(赤尾照文堂 一九七二年) 三四九頁。
- (9) 既出『天保名古屋狂俳集』五四頁。
- (10) 鈴木勝忠編『未刊雑俳資料』三五期十三『狂俳選集』(一九六六年)。
- (11) 野田實家文書については、『愛知県史』資料編十五「近世一名古屋・熱田」九六六頁に掲載がある。
- (12) 「石橋庵真酔の文芸活動」(富田和子『尾張狂俳の研究』勉誠出版 二〇〇八年) 二八三頁。
- (13) 尾崎久彌「郷土本概説」(『近世庶民文学論考』中央公論社 一九五〇年) 一六頁。
- (14) 「猿猴庵日記」文政七年正月廿三日(『日本都市生活史料集成』四 学習研究社 一九七六年) 六二七頁。

* 生活科学部 生活環境デザイン学科

花の星 おろしう 目あがり おれ 志望の後 著子縁 正月 折く やま 早	合鏡の目よりとむ 跡のあへ珍入とせしむ 車の上よりつとけり 菊の縁つと始免しり 縁つとふむ人よりとむ 吊砂つとさけけりもや ゆく神よりせけりぬ ねとヨケれあさ書とせしむ まうとま子より二人出れ 伏見樹道の古細と	巴水 雅樂 如雀 柳枝 吳朗 其白 野人 不及 香菱 里瓶	巴水 山月 花樂 巴水 雨晴 巴水 湖石 遊系 龜ト 吳朗 不及
---	--	--	--

折の虫 子縁花 今指 カお世 いさ 晴出 うら 夫の 門 早	ゆ終ふとあわつ留まなり う満きうふ教あめてをる 嘆ふあては舞たり 黙目の珠敷すらすとる 花の小舟残漕と 瘡癩すり浮れ氣てみる あやひあやうと海とる あ極つとけりるや 尻うととるも城とる 扇根よとる色形妻の又更とる	野人 如雀 馬仙 吳朗 柳朗 龜ト 里瓶 梁雀 如雀 巴水	東月 山月 東月 馬仙 巴水 馬穴 不及 生笑 竹馬 龜ト
---	---	--	--

